

三鷹の寺 太宰も眠る

文人の 武蔵野

東京西郊の三鷹駅に降り立ち、南口の商店街を通り抜けたその先に、禅林寺という黄檗宗の寺院があります。徐に墓地に入り中心部まで進むと、向かって右手に明治を代表する文人森鷗外のお墓が、左手に昭和を代表する文人太宰治のお墓が位置する一角があります。今や禅林寺は、文学愛好者が足を運び手を合

森鷗外 ①



森鷗外 (国立国会図書館デジタルコレクションより)

せる聖地でもあります。津島修治(1909〜48年)が作家太宰治として禅林寺に埋葬されたのは、鷗外のお墓がそこにあつたからです。太宰の小説「花吹雪」には、次のような一節があります。

「(上略)すぐ近くの禅林寺に行ってみる。この寺の裏

には、森鷗外の墓がある。どういうわけで、鷗外の墓が、こんな東京府下の三鷹町にあるのか、私にはわからない。けれども、この墓地は清潔で、鷗外の文章の片影がある。私の汚い骨も、こんな小綺麗な墓地の片隅に埋められたら、死後の救いがあるかも知れない(下略)」。この作品は一種の喜劇であり、「男子の真価は、武術にあり」という趣旨の「先生の講義を「私」がツツコミを入れながら速記するという形式をもつフィクションです。「文豪」にあやかりたいという願いをくみとつた周囲が、入水後の太宰の遺体を鷗外墓の近くに葬りました。鷗外の魅力が「凜平たる氣韻のある」

文章と「無礼者よれもの」に対しては敢然と腕力をふるう武術にあることを確かめ、「同じ墓地に眠る資格は私に無い」と墓前で「萎縮」してみせる「私」の姿は、確かに太宰のイメージと重なります。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

(新潮社提供)



おすすめの1冊

「津軽通信」

疎開先の津軽で書いた5つの短篇が「津軽通信」と総称され、それを表題作としたのが新潮文庫「津軽通信」です。三鷹時代に書いた短篇の方が多数収録されており、「花吹雪」もそのうちの一篇です。短編小説の名手であり、明るくユーモラスな太宰像がみてとれます。